実習指導者講習会参加者の受講前後の変化
－2年間の実施を通して－

青木康子　　國岡照子　　陣田泰子

要旨

実習指導者講習会実施後の受講生の変化を明らかにし、本講習会の効果を探ることを目的に、平成8年度、9年度において質問紙調査を行った。その結果、①実施期間、時期、②カリキュラム③実施した学習内容について、多くの受講生から「満足している」との反応が得られた。また、④受講動機と受講後の気持ちとの関係は見られなかったが、受講への期待と参加意欲の間には相関関係が認められた。更に⑤受講前よりも受講後の自尊感情（Self-Esteem）の高まりが認められた。

以上のことより、平成8年度及び9年度講習生の講習前後の変化がみられ、8年度のカリキュラムを多少変更したことにより、9年度は更に講習後の満足が高いことから本講習会の効果が示され、今後の企画、実施に対する示唆が得られた。

キーワード：実習　　実習指導者　　学習効果

Ⅰ　はじめに

看護基礎教育における臨床実習は、授業全体の1/3以上もの時間を占める重要な授業である[1)]。しかし、学生にとって、教室での授業と異なり、臨床の動的な環境の中で、看護の実践を通してこれまでの学びを統合していく学習過程は、決して易しいことではない。

実習指導者は、実習の場において、患者の安全・安楽を確保しながら、学生の学びを支援する重要な役割をもち、その存在は、学習効果を左右すると言える[2)]。しかし、実習指導者への教育は、十分に行われているとは言えない現状にある。

本学では、平成8年度より県との共催で、「実習指導者講習会」を開催することになった。7週間という短期間の講習ではあるが、様々な学びを得て講習生は確実に変化している印象をもつ。2年を経過した現在、本講習会での実施を振り返り、その実態と講習の効果を明らかにし、今後の方向を探るための資料としたい。

Ⅱ　研究目的

平成8年度、9年度の2年間の実習指導者講習会の受講生の実態を明らかにし、講習会前後の受講生の変化及び2年間の比較を通して、本講習会の効果を探る。

Ⅲ　用語の定義

臨床実習　：基礎看護教育において指定された実習時間に行われる臨地での実習

実習指導　：臨床実習において、看護学生が学習目標達成できるための、教育的かかわり

実習指導者：実習指導を行うと共に、効果的に実習が展開できるための連絡・調整の役割をもつ者

Ⅳ　研究方法

1）対象

平成8年度実習指導者講習会受講生　50名

平成9年度実習指導者講習会受講生　45名

2）方法

(1) 調査方法

平成8年度、平成9年度受講生とも、開講時と閉講時、体験学習終了時に質問紙による集合調査

(2) 調査内容

＜受講前＞　①一般属性及び施設の規模（病床数）、勤務場所など

②経験年数、実習指導経験の有無と任命方法など

③受講動機、講習会への期待と参加意欲
④本講習で学びたいこと

＜受講後＞ ①カリキュラムについて
②現在の気持ち
③体験学習について
④講習会に対する感想・意見など

＜受講前後＞
①Self－Estem（以後S・Eと記す）

(3) 調査時期

	受講前	体験学習後	受講後
平成8年度	平成8年8月5日	8月30日	9月17日
平成9年度	平成9年8月4日	8月22日	9月19日

3) 分析方法

アンケート集計結果の統計的分析は、Statviewを用い、有意差及び相関関係の有無を分析する。

V 本講習会のカリキュラム概要

1) 実習指導者講習会実施の趣旨

神奈川県内に勤務する保健婦、助産婦、看護婦（士）に対して、看護基礎教育についての理解を深めると共に、実習指導に必要な知識・技術を習得させ、効果的に実習指導ができる人材を育成する。

2) 期間

平成8年度:平成8年8月5日(月)～9月17日(火) 32日間(186時間)
平成9年度:平成9年8月4日(月)～9月19日(金) 32日間(186時間)

3) カリキュラム（表1）

表1 カリキュラム

（単位：時間）

教育科目	授業科目	学習内容	平成8年度	平成9年度
教育に関する科目（45時間）	教育概論	教育原理	12	12
		教育方法	12	12
		教育評価	6	6
	教育心理概論	青年心理	3	3
		学習心理	12	12
看護教育に関する科目（120時間）	看護教育論	看護教育論	6	3
		実習指導概論	6	6
		人間理解	24	21
	看護教育の展開	看護教育課程	3	6
		看護過程	6	6
		実習指導案作成	0	6
		各看護学	21	12
	実習指導の展開	実習指導方法	6	6
		実習指導方法演習	42	45
		見学	6	9
一般教養に関する科目（15時間）	情報の活用	文献検索	3	3
		情報機器の活用	3	6
	トピックス	保健・医療・看護の動向	6	4.5
		専門看護婦制度	3	0
		クリティカルシンキングについて	0	1.5
		合計	180	180

註:平成8年度 実習指導案作成は、実習指導方法演習に含む。

4）受講資格

①神奈川県内に勤務する保健婦（士）、助産婦、看護婦（士）で、3年以上の実務経験を有する者

②常勤者で、現在、実習指導を担当している者、または今後担当する予定の者

③施設長の推薦があり、全日程に参加できる者

④募集人員及び応募状況

平成8年度の募集人員は、30名、9年度40名であったが、いずれも大幅に上回る応募状況となり、平成8年度のみ初年度ということもあり、応募者50名全員受入れ、9年度は選考基準に従って45名とした。

表2　年齢構成

（単位：人）

	8年度		9年度		合　計	
20～24歳	3	(6%)	0	(0%)	3	(3.2%)
25～29歳	19	(38%)	16	(36%)	35	(36.8%)
30～34歳	16	(32%)	14	(31%)	30	(31.6%)
35～39歳	4	(8%)	6	(13%)	10	(10.5%)
40～44歳	5	(10%)	6	(13%)	11	(11.6%)
45歳以上	3	(6%)	3	(7%)	6	(6.3%)
合　計	50	(100%)	45	(100%)	95	(100.0%)

Ⅵ　結果

1）受講生の背景

(1) 年齢構成

受講生の年齢構成は、表2のとおりで、25才～34才までが全体の70%を占めていた。(平成8年度受講生70%，平成9年度受講生66%以後併記の場合は、前者の記述は平成8年度受講生、後者は平成9年受講生を示す）平均年齢は、32.1歳、33.4歳　であり、平成9年度は、35歳以上の受講生が平成8年度よりも多かった。

(2) 職場

両年度を通して、94%以上が病院勤務の看護婦であり、その⅔は300床～699床の病院に勤務する看護婦であった。

(3) 勤務場所

平成8年度、9年度共に受講生の60%が、内科系および外科系病棟勤務であった。

(4) 職位

全体の72%がスタッフナースであり、20%が主任（係長）の役職を持っていた。

(5) 経験年数

①看護婦としての経験年数は、平均9年6ケ月、9年8ケ月であった。

②実習指導者としての経験年数は経験無しから最高11年であり、平均2.3年、2.7年であった。

平成8年度は、指導経験のない受講生が50名中12名（24%）いたが、3年以上の指導経験者も16名（32%）と多かった。平成9年度は、指導経験のない受講生は4名（8.9%）と少なく、1年未満～3年までの経験者は30名（66.6%）であり、平成8年度に比べ、指導経験の浅い人が多く受講していた。

(6) 実習生の受入れ状況

平成8年度、9年度合わせると、1校のみの受入れが65%、複数の学校を受入れている施設は30%であった。課程別では、3年課程45%、2年課程23%、准看護婦課程は20%であった。

(7) 臨床指導者の任命について

平成8年度では、婦長による任命が最も多く36%、次いで総婦長28%、その他22%であったが、平成9年度は、総婦長37%、婦長28%、施設長20%であった。全体としては、総婦長（看護部長）、婦長による任命が62%を占めていた。

(8) 院内臨床指導者研修の有無と受講経験

実習指導者に対する院内研修の有無では、表3-1のように平成8年度では、なしが60%であったが、平成9年度では42%となっていた。院内研修が実施されている施設の受講生の院内研修参加状況は75%、96%であった。(表3-2)

表3-1　院内研修の有無　　n＝95

	無		有		合　計	
平成8年度	30	(60%)	20	(40%)	50	(52.6%)
平成9年度	19	(42%)	26	(58%)	45	(47.4%)
合　計	49	(52%)	46	(48%)	95	(100.0%)

表3-2　受講経験　　n＝46

	有		無		合　計	
平成8年度	15	(75%)	5	(25%)	20	(43.5%)
平成9年度	25	(96%)	1	(4%)	26	(56.5%)
合　計	40	(87%)	6	(13%)	46	(100.0%)

2) 本講習会の受講に関すること

(1) 受講動機

本講習会における受講生は、受講資格をもとに各施設が推薦し、その中から選考している。

平成8年度では、84% の受講生が「上司に勧められて」の受講であり、9年度では76% に減少しているものの、「自分から」と比較すると圧倒的に多く、全体としては、「上司に勧められて」が80% を占めていた。

(2) 受講前の講習会への期待と参加意欲

本講習会への期待と参加意欲は、5段階尺度による平均値及び標準偏差は、表4のようである。期待は平成8年度、9年度共に4点以上とかなりの期待を示し、参加意欲は、期待ほどではないが、4点に近い数値を示している。

表4　講習を受ける気持ち

	n=50 平成8年度 平均値		n=45 平成9年度 平均値	
(1)期待	4.26	±0.57	4.22	±0.60
(2)参加意欲	3.94	±0.74	3.86	±0.81

表5　講習会で学びたいこと

複数回答

	平成8年度		平成9年度	
学生の心理・若者気質	35	(31.5%)	32	(32.3%)
よりよい実習指導方法	30	(27.0%)	18	(18.2%)
教育とは、教育方法	13	(11.7%)	22	(22.2%)
人間理解	10	(9.0%)	6	(6.1%)
指導者の役割	10	(9.0%)	10	(10.1%)
自己の振り返り	8	(7.2%)	8	(8.1%)
スタッフの協力のえ方	5	(4.5%)	3	(3.0%)
合計	111	(100.0%)	99	(100.0%)

表6　カリキュラムについて

	8年度 平均値	8年度 標準偏差	9年度 平均値	9年度 標準偏差
(1) 講習期間	2.42	±0.50	2.77	±0.58
(2) 講習の時期	2.96	±0.93	3.18	±0.90
(3) 科目構成	3.24	±0.63	3.80	±0.85
(4) 時間割り	3.16	±0.68	3.32	±0.83
(5) 演　習	3.60	±1.07	3.84	±1.11
(6) 見　学	2.30	±0.93	3.10	±0.91
総　平　均	2.95		3.33	

(3) 講習会で学びたいこと

自由記載の中から、同じ意味をもつ項目にまとめ、カテゴライズしたところ学びたいことの最も多い内容は、平成8年度、9年度ともに「学生の心理・若者気質」35名 (31.5%)、32名 (32.3%) であり、次は、8年度では「よりよい実習指導方法」30名 (27%)、9年度は「教育とは、教育方法」22名 (22.2%) であった。第3位は、前述の2位が入れ替わっている。平成8年度、9年度を通しての本講習会における受講生の学びたい3つの内容は「学生の心理・若者気質」「よりよい実習指導方法」「教育とは・教育方法」であった。(表5)

3) 受講後

(1) カリキュラムについて

①期間・時期・科目構成・時間割・演習・見学について

カリキュラムについて5段階尺度を用いて聞いた結果、講習期間、時期、科目構成、時間割、演習、見学の平均値は、表6のようであり、平成8年、9年度ともに演習が最も高値を示し、3.60、3.84であり、次いで科目構成、3.24、3.80、時間割、3.16、3.32となっている。全ての項目において9年度の方が平均値が高い。(図1)

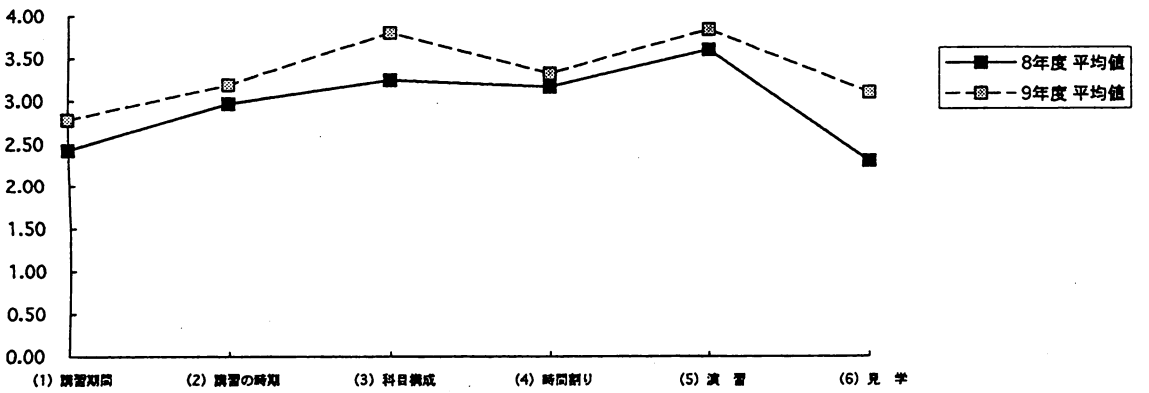

図1　平成8年度、9年度カリキュラムの比較

表7　現在の気持ち

	8年度		9年度	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
(1) 自分を見つめなおしリフレシュできた	4.6	±0.47	4.5	±0.55
(2) 実習指導者としての考え行動が明確になった	4.2	±0.52	4.0	±0.55
(3) 今後機会があれば更に学びたい	4.7	±0.54	4.5	±0.70
(4) 仲間作りの機会になった	4.2	±0.79	4.5	±0.59
(5) 自分なりに看護を見直すことができた	4.0	±0.70	4.4	±0.57
(6) 講習で学んだことを今後活用したい	4.8	±0.42	4.7	±0.46
総平均	4.4		4.4	

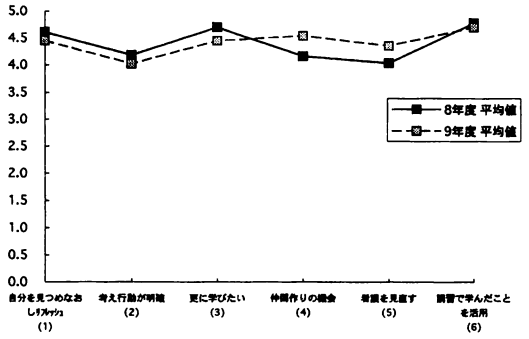

図2　平成8年度、9年度受講後の比較

(2) 受講後の気持ち

表7にみられるように各項目とも平均値4点以上と高く、中でも「講習会で学んだことを今後活用したい」4.78、4.70、「今後、機会があればさらに学びたい」4.7、4.45「自分を見つめ直し、リフレッシュできた」4.61、4.45の項目は高値を示している。(表7、図2)

(3) 体験学習

①時期・期間・場所について

時期については、平成8年度の反省をもとに、9年度は早い時期に変えているので、2.96から3.88と平均値が高くなっている。期間については、37名（84%）、34名（77%）の人が「丁度よい」との回答が得られたが、場所については「良くない、あまり良くない」の回答が多くなっており、平均値も1.93、2.36、と他の項目より一段と低い値である。(表8、図3)

②学びについて

体験学習での学びについての平均値をみると、自己理解　4.02、4.57、他者理解　4.07、4.57、相互理解　4.07、4.39といずれの項目も平成9年度の方が高くなっている。(表8、図3)

③その他の意見

表9のように最も多い意見は「多くの人との関わりの中で学べた」が平成8年度、9年度共に多い意見である。次に「自分について、他人について理解すること」についてであった。研修場所が埼玉県であったことから、「近くの施設で実施して欲しい」との意見、もあった。

表8　体験学習

	8年度		9年度	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差
時期	2.9	±1.08	3.8	±1.03
期間	2.9	±0.43	2.9	±0.48
場所	1.9	±0.80	2.3	±1.04
自己理解1	4.0	±0.73	4.5	±0.55
他者理解2	4.0	±0.73	4.5	±0.50
相互理解3	4.0	±0.66	4.3	±0.58
コミュニケーション	4.0	±0.72	4.3	±0.67
役割	3.5	±0.73		
リーダーシップ	3.4	±0.87	3.5	±0.66
総平均	3.4		3.8	

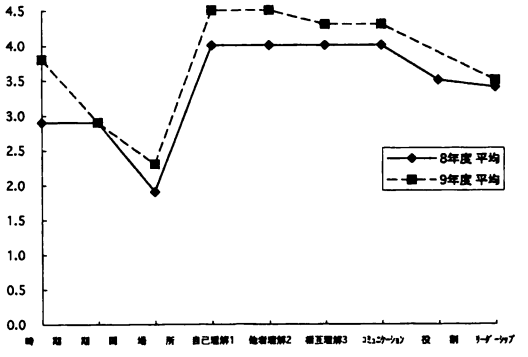

図3　平成8年度、9年度体験学習の比較

表9　体験学習についての意見（上位6位まで）　（複数回答）

	平成8年度	平成9年度	計
多くの人との関わりの中で学べた	12名 ／50人中	11名 /45人中	23名
自分、他人を理解することについて学べた	10名	5名	15名
研修場所をもっと近くにして欲しい	6名	7名	13名
楽しく研修できた	6名	5名	11名
もっと自由時間が欲しい	2名	6名	8名
施設をもっと利用したかった	1名	5名	6名

(4) 講習会に対する意見・感想

自由記述したものをまとめた結果、表10のように、最も多い意見は「自己を問い直すよい機会だった」、「初めは気が重かったが、参加して良かった」であった。

4) 受講動機と受講後の気持ちとの相関について

受講動機（上司に勧めれて、先輩に勧められて、自ら）と講習会終了後の受講生の気持ちとの相関関係をみたところ、強い相関関係は認められなかったが、「講習会全体を通して学ぶことができた」と「講習会で学んだことを今後活用したい」とのあいだにはr=0.57のかなりの相関関係があった。また、講習会に対する期待と、受講生の参加意欲との間には、r=0.67 のかなりの相関関係が認められた。これらは、平成８年度、９年度ともに同様な傾向がみられた。

5) 受講動機と体験学習との相関について

表 11 にみられるように受講動機と体験学習後の学び（自己理解、他者理解、相互理解、コミュニケ - ション）との相関関係をみたところ、「他者理解」と「コミュニケ - ション」においてr=0.722 の強い相関関係が認められた。また、「自己理解」「他者理解」「相互理解」の間においてもかなりの相関関係がみられ、両年度共に同様な傾向が認められた。

表 10 受講後の意見

（複数回答）

	平成８年度		平成９年度		計	
自己を問い直すよい機会だった	10名	(13%)	14名	(17%)	24名	(14.7%)
初めは気が重かったが、参加してよかった	11名	(14%)	13名	(16%)	24名	(14.7%)
多くの人との出合い（学生・教員）が刺激になった	10名	(13%)	13名	(16%)	23名	(14.1%)
楽しく、のびのび研修できた。自由な雰囲気で学べた	12名	(15%)	7名	(8%)	19名	(11.7%)
これまでの指導者としての学びが確認され明確になった	8名	(10%)	8名	(10%)	16名	(9.8%)
学んだことを振り返りながら生かしていきたい	9名	(11%)	7名	(8%)	16名	(9.8%)
多くの学びを得た、学生指導だけでなく他にも役立つ	6名	(8%)	8名	(10%)	14名	(8.6%)
学ぶ楽しさを感じた、もっと学びたいと思った	8名	(10%)	3名	(4%)	11名	(6.7%)
3交替の日々から学生になりきり久しぶりに勉強した	4名	(5%)	5名	(6%)	9名	(5.5%)
すぐ改革と思わず、他のスッタフの協力を求めながら少しずつ取り組んでいきたい	2名	(3%)	5名	(6%)	7名	(4.3%)
合　計	80名	(100%)	83名	(100%)	163名	(100.0%)

表 11　受講動機と体験学習の関係

	平成8年度		平成9年度	
項　　目	相関係数	有意水準	相関係数	有意水準
自己理解と他者理解	0.59	***	0.58	***
自己理解と相互理解	0.55	***	0.61	***
自己理解とリーダーシップ	0.09		0.34	*
他者理解とコミュニケーション	0.72	***	0.21	*
他者理解とリーダーシップ	0.27		0.30	***
相互理解とコミュニケーション	0.53	*	0.51	*
相互理解とリーダーシップ	0.24		0.36	*
コミュニケーションとリーダーシップ	0.45	*	0.35	*

* P<0.05　** P<0.01　*** P<0.001

6）受講前後のＳ・Ｅの変化について

①平成８年度

講習会前のＳ・Ｅ値は、総平均2.63であったが、講習会後では、2.84となり平均値が0.21上昇している。自尊感情の中では、講習会後、最も変化した項目は「私は、全ての点で自分に満足している」が、1.94から2.4になり、0.46上昇している。次いで「私は、時々自分がまるでだめだと思う」の、否定する値が2.22から、2.52へと変わり、さらに「私は自分にはいくつか見所があると思っている」が、2.60から2.88へと上昇している。項目１の「私はすべての点で自分に満足している」と、項目２の「私は時々自分がまるでだめだと思う」では，平均値の差の検定で有意差（P〈0.05）が認められた。（表12）

表12　Ｓ・Ｅの変化

私はすべての点で自分に満足している	1.94	0.84
私は時に自分がまるでだめだと思う	2.22	0.82
私は自分にはいくつかの見どころがあると思っている	2.94	0.59
私はたいていの人がやれる程度には物事ができる	2.88	0.63
私にはあまり得意に思うことがない	2.6	0.76
私は時々たしかに自分が役立たずだと感じる	2.6	0.76
私は少なくとも、自分が他人と同じレベルに立つだけの価値のある人間だと思う	2.62	0.92
もう少し自分を尊敬できたらなばと思う	2.3	0.84
いつでも自分を失敗者だと思いがちだ	3.14	0.7
私は自分に対して前向きの態度をとっている	3.06	0.71
総平均	2.63	

②平成９年度

平成９年度の尺度は８年度が４段階尺度を用いた結果であるに対して、５段階尺度を用いたため全体に平均値が高値である。９年度において、講習会前後で最も平均値の変化が大きい項目は、８年度同様に「私は、全ての点で自分に満足している」であり、2.44から3.02へ0.58の上昇が認められる。次に、「私は、あまり得意に思うことがない」では3.09から、3.57へと変わり、その次が「私は、他人と同程度の価値がある人間だと思う」が、3.0から、3.34へと上昇している。項目１の「私はすべての点で自分に満足している」と項目５の「私にはあまり得意に思うことがない」平均値の差の検定で有意差が（P〈0.05）あった。

Ⅶ　考察

1）受講生の背景からみた講習会の位置つけ

受講資格を実務経験5年としていることから、平成８年度、９年度ともに25歳～29歳の年齢層の受講生が最も多く、次いで30～34歳が多い。経験年数５年以上、すなわち看護基礎教育終了後５年以後の看護婦の特徴は、P、ベナーのいう「臨床的技能の習得段階」の「中堅」のステージから、エキスパートにあたると考えられる[3]。この時期は、それまでの状況の部分的な把握から、全体としてとらえることができるようになる時期であり、「中堅」は個別に差はあるものの通常は看護婦として働いた５～６年後である」と言われている。自分の役割の範囲で見ていたものが視野が広がり、全体に目が向けられる時期であると考えるならば、この年齢層の受講生が指導者という新たな役割をもつ、あるいは実習指導の経験を積み重ねるということは、大局的な見地にたった見解をもつことに発展すると考えられる。施設における実習指導者に対する研修の有無をみても、平成９年度においては、42％しか実施されておらず、平成８年度でも60％に過ぎない。このような状況の中で、７週間にわたる実習指導に必要な学びを集中して得ることは、中堅としての力量を及び実習指導の能力を増進する機会になると考えられる。

2）受講動機と学びとの関係について

講習会への参加は「上司に勧められて」が両年とも高い。東京都で行われている臨床指導者講習会[4]、神奈川県主催の臨床指導者講習会[5]でも「上司に勧められて」が圧倒的に多いという同様な傾向がみられている。受講動機と講習会終了後の受講生の気持ちとの相関がないことから、受講の動機を問わず本講習受講後、今まで以上に実習指導についての学びに対する動機づけが為されたと考えることができよう。講習会終了後の意見、の中で「どのような研修内容で、どのような方法で行われるのか不安だったが、終了後は満足している」という、多くの受講生のコメントからも言えることである。今後、この受講生の反応が各施設において同僚などに伝わり、やがて前向きな参加姿勢の受講生の増えることが期待される。

3）受講に関する気持ち（期待と参加意欲）

本講習会に対する期待は、毎年非常に高いことから、受講生の期待のほどが推測される。これに対して、参加意欲は期待の値ほど高くはないが、「指導者としての自分を見つめ直す機会にしたい」「看護の場を離れ、理論や方法を改めて学びたい」との参加意欲の表明が多くみられる。期待と参加意欲の相関関係から、大きく期待を抱いて参加している人は、参加意欲も高くレヂネスとして十分であると考えられる。また、これらの期待、参加意欲が高いことは、前述の各施設での院内研修の実施状況の低いことからも、本講習に対する期待が高くなる要因ととらえてよいだろう。

また、上司の勧めによって本講習を受ける人が多い割りには、受講生の期待が高すぎるという矛盾する現象が見られるが、これは長い臨床活動の中で、何らかを学びたい気持ちを多くの人が抱いている、と考えることができるのではないだろうか。講習に参加することによって、自己を「変化」、「開発」させたいという期待もこの気持ちの中には含まれているのではないかと考えられる。

講習会で学びたいこと

受講生の講習前考えていた「学びたい内容」は、大別すると①学生について②教育について③実習指導方法について、とまとめることができる。これらの3つの内容は、神奈川県主催の指導者講習会における「学びたいこと」の内容と比較すると、上位3項目は「実習指導に関すること」「人間理解」「教育・看護教育」であり、「人間理解」の中に「学生気質の理解」が含まれており類似している。また、これらの内容を講習会の趣旨からみてみると、「看護基礎教育についての理解」、には②の教育について、「実習指導に必要な知識・技術の習得」には③の実習指導方法、「効果的な学習」には①の学生の心理・気質を知る、に対応すると考えることができる。本講習会のカリキュラムと受講生の学びたい内容が一致していると考察できる。

4）カリキュラムについて

平成8年度の総平均値の低さは、最も平均値の低い項目である「見学」と「講習期間」の値が大きく影響している。見学については、8年度は見学日を1日としていたが、アンケートの結果から9年度では1日半とした。その結果9年度では、平均値が高くなり、0.8の変化がみられた。平成9年度の総平均値は、3.33であり平成8年度と比較すると、0.39の上昇があり、前年度の反省に基づき修正した結果、効果があったものと考えられる。8年度、9年度を通して科目構成、演習、時間割の平均値が高いことは、本講習会のカリキュラムについて支持されているものと考えられる。

5）体験学習について

体験学習についての平均値は、平成8年度、9年度共に非常に高く、受講生の反応の強さを示している。学びの中でも、自己理解、他者理解、相互理解についての平均値の高さは、体験学習の二つの目的である、「体験学習方法によって自己理解、他者理解を深め自己啓発する」「グループの共同生活を通して相互啓発、集団理解を深める」の達成状況を示していると考えられる。自己理解、他者理解、相互理解における3者の相関関係の強さは、学生と指導者の関係づくりに今後反映されるものと考える。

レポートの中には「個人的には、今までの自己を見つめ冷静に自己分析し、自然体で人と接することの素晴らしさ、快さに気づく機会になりました。その変化の過程では自己の中の葛藤でつぶれそうになりましたが、それを乗り越えた自分に驚き、ほめたい」（平成9年度受講生アンケートより）などもあり、仲間と共に短い共同生活をする中で、自己、他者に気づく大切な機会になっていることがうかがえる。

6）S・Eからみた変化

S・Eは、アメリカの心理学者であるRosenberg・Mの作成した質問紙による「健康な自己愛」を示す尺度である[6]。松下、菅により日本版が作成され、本調査ではこれを用いた。講習会前後の受講生の「自己」に対する評価がどのように変化するのかをみることにより講習会からの影響を考察する意図である。

平成8年度、9年度共に講習会前よりも後のほうがS・E値が高い結果から、受講生の自己を尊重する気持ちが変化したことが考察できる。長い実習経験の中で、自己に対する自信が持ちにくかった状況から、講習会での学びや受講生同志の関わりの中で自己を認め、現状から始めて

いこうとする意欲の結果と考えることができる。

7) 講習終了後の気持ちと講習会に対する意見・感想について

「講習会を終えての気持ち」は、これまで述べてきた受講生の反応、即ち「カリキュラムについて」や、「体験学習」などの講習項目中、最も高い平均値を示している。平成8年度、9年度共に受講生の終了後の気持ちは、「講習会で学んだことを今後生かしたい」が最も多いということは、本講習会での学びが今後の実習指導の中で活かせるものであり、講習会の内容が効果的であったと解釈できる。受講生の記載の中には、「本講習会での学びは、実習指導に関することだけでなく、さらに広く役立つものであった」という意見も多くあった。そして、「この講習会を経て、学ぶ楽しさを感じ、今後さらに機会があれば学びたい」と記載されている。本講習会が、今後も学び続ける意欲を引き出すことができたと読みとることができ、このことは本講習会の趣旨である「効果的に実習指導ができる人材を育成する」以上の成果を得たと考える。

まとめ

2年を経過した実習指導者講習会の受講生の学びの実態と変化を明らかにした結果、以下のことが得られた。

①受講生の背景として、平均経験年数は、32歳、33歳であり、実習指導経験は、経験無しの人から、11年の経験者までを含み、多くが1～3年の経験であった。また、院内における実習指導者に対する院内研修会の実施状況は9年度の方が増えているものの、半数近くは実施されてない。本講習会に対する期待は講習生の約90%がかなりの期待を持って参加していた。

②学びたい内容の上位3項目は、「学生の心理・若者気質」「よりよい実習指導方法」「教育について・教育方法」であった。学習内容の評価は、演習が最も良く、受講生同志の中で多くの学びを得ている。

③講習前後の受講生の変化は、ほとんどの項目において認められ、8年度よりも9年度の方が良い結果へと変化していた。

④講習会を通して、自己を振り返る良い機会だったととらえ、参加前の気の重い状態から、参加して良かった、気持ちが変わったという意見が多かった。

⑤体験学習の学びは、自己及び他者の存在に対する気づきが大きい。研修場所に関しては今後検討が必要である。

以上ことから、本講習会は有効であったと言える。

引用・参考文献

1) 石井範子：望ましい臨床実習指導者とは、Quality Nursing，1（6）,6、1995 文光堂
2) 高木永子：臨床実習指導の考え方と方法、Nurseプラス1　62～66、1991照林社
3) P. ベナー著、井部俊子他訳：ベナー看護論、19～22、1992医学書院
4) 東京都看護協会及び都立医療技術看護短期大学主催・臨床指導者研修報告書：第1回～4回（199　～199）
5) 箕浦とき子他：実習指導者養成課程受講生の学習ニーズと学習反応に関する一考察、35～46　神奈川県立看護教育大学校紀要　1994
6) 管佐和子：S・Eについて、看護研究、17（2）、21～27、1984　医学書院
7) 松下覚　：Self-imageの研究、日本教育心理学会第11回総会発表論文集、280～281

A Study On The Changes Of Students' Responses Between Before And After Taking Nursing Clinical Practicum

Yasuko AOKI,Teruko KUNIOKA,Yasuko JINDA

Abstract

The purpose of this study was to evaluate rhe observable changes among the students after having participated in the '96 and '97 seminars for the clinical practicum instructors. A questionnare was administered to the students of the participating students.

The findings included the following:

1. The majority of the students answered that they were quite satisfied with ① the time and period,② the curricum,and ③ the content of the seminars.

2. Positive correlation was found between the studebts'motives of seminar participation and their impressions after having participated in the seminer.

3.Positive cirrelation was found between the students'motives of seminar and how much they had expected from the seminar.

4.The students self-estee were enchanced after the seminar.

5.the students showed obserble changes after having participated both in the '96 seminar

The students'levels of satisfaction were greater following '97 seminar than following '96 seminar partlyowing to the inprovements in '97 curriculum.these findings showed positive effects of the seminar and the validity for continuation.

Key Words : Clinical practicum
Clinical practicum instructor
Effect of learning